（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　名　　藤田（ふじた）　佑（ゆう）

本論文は三島由紀夫の昭和２４年～３０年前後の作品を対象に、特に戯曲と詩との関係を通じて、小説の方法を模索し続けた作家活動のプロセスを緻密に跡づけた論考である。

構成は三部からなる。第一部では「獅子」「盗賊」の二作と川端康成への論評が扱われている。「獅子」においてはエウリピデスの「メーデア」、「盗賊」においてはラディゲの「ドルジェル伯の舞踏会」がそれぞれ踏まえられながらも、実際には作中人物の情念が空洞化され、「悲劇」が不成立に終わる作品構造が指摘されている。それを通して自身の日本浪曼派時代のセンチメンタリズムの克服と、戦後文学の持つ楽観的なロマン主義的傾向の批判とがめざされている、というのが本論の見取り図である。川端康成への言及も、作品と作者を安易に結びつける戦後文学のあり方へのアンチテーゼであるとされており、先の論点と合わせ、三島の文学史的な位置づけの見直しを迫る見解として注目される。

第二部では「仮面の告白」「青の時代」「禁色」の三作が扱われている。「仮面の告白」論は、作品前半の「私」が性的倒錯者を演じているのに対し、後半ではそれを仮面にして異性愛の「告白」がなされている、という解釈のもと、それを通して自己劇化、あるいは言語を介してロマン主義的な「告白」を行うことの困難が示されている、とされている。「青の時代」論では、現実の事件を素材としながら、主人公の演技性をことさらに強調することによって、結果的に人物の虚構性があらわになっていく構造が指摘されている。「禁色」論では、それまでセンチメンタリズムと戦ってきた三島が、むしろこれを進んで演じるようになる変化が見据えられている。主人公の老作家と違い、三島があえて世俗的な「作者」をふるまってみせたのは、みずからの作品から疎外されていく小説家の宿命を自覚した上でのことであり、肉体によって演じられる戯曲には永遠に到達できない小説の宿命が、作中でもメタレベルで問われている、というのが論者の主張である。

第三部では「潮騒」と「ラディゲの死」「詩を書く少年」、「金閣寺」が扱われている。「潮騒」においては、舞台の歌島をメタファに、高度経済成長時代に「文学」が安易に消費されていく風潮が風刺されているのであるという。「ラディゲの死」「詩を書く少年」を論じた章においては、自己の外部に言葉を構築していく「小説家」と、存在それ自体が美である「詩人」との狭間で、そのどちらにも身を置くことのできぬ三島が、それまでの小説観に見切りをつけていく過程が見据えられている。終章は「金閣寺」論で、言葉と美の不一致を問う中で、常に「小説」のあり方を反問し続ける三島文学の特色が明らかにされている。

総じて、なお論じ残された作品はあるものの、常に詩、戯曲と緊張関係を保ちながら小説の方法を問い続けたその軌跡を、具体的に明らかにし得た点は高い評価に値する。

よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。